

ディラン・ラカポシ展望

アルパインツアー

2019年6月20～23日

カラコルム山脈



ミナピン氷河

ディラン(7788m)とラカポシ(7266m)はパキスタン北部にあるカラコルム山脈にある山である。広義な見方ではカラコルム山脈もヒマラヤ山脈の一部であるとする人もいる。私としては今回を含めるとヒマラヤ12回目(ネパール8回・インド2回)であるので、2006年のバルトロ氷河も含めてカラコルムもぜひヒマラヤに入りたい。ミナピン氷河に沿ってディラン・ラカポシベースキャンプまで行くのが今回のコースである。桃源郷として名高いフンザはこの地域にある。私は、桃源郷＝フンザと思っていたのであるがそれは間違えのようである。フンザが桃やあんずの花などに恵まれた土地であり、春先などはこれらが咲き乱れて美しい土地であるので、桃源郷と称されるようになったといったところみたい

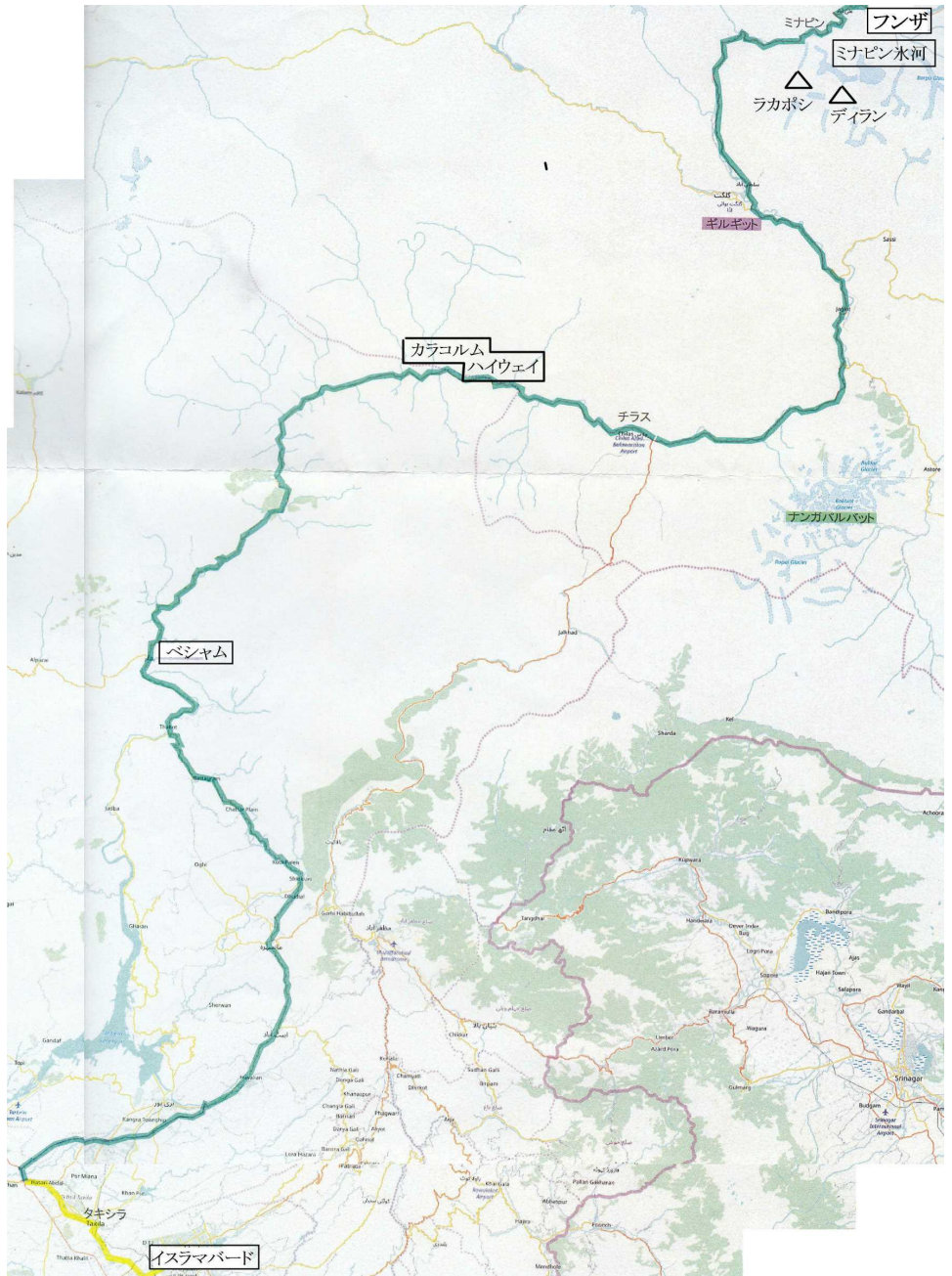


だ。ちなみに“桃源郷”で検索したらフンザなんて引っかかりもなかった。中国の漢詩の世界のこのようである。

首都イスラマバードからフンザに至る道は2006年のバルトロ氷河の時と途中まで同じである。インダス川に沿ってカラコルムハイウェイを登って行く。この道を走るの、主役は主にデコトラ（デコレーショントラック？）と言われる大型トラックだ。鉱石を運ぶのが多いということであるが、木材を積んだのやコンクリートの原料を積んだのも多い。これらの間に乗用車や相乗りタクシーが入り込む。これらが自己主張しあって何とか先に行こうとするから、よけいに渋滞は激しくなる。工事中の道でも通行整理をする人などいない。通過する道路上には人が溢れている。イスラム圏では女は外に出ないということではほとんどが男である。意外と小さな子供が多い。パキスタンもイスラムの例にもれず禁酒国である。夜の時間帯にやることがな

ければ子供が増えるのは当たり前か。日本の少子化対策メンバーはこここのところを研究しなければいけない。50歳以下で子供が3人以上いない人に対しては例外なく禁酒法を適用すればいいのだ。

前はチラスで1泊、次の日にバルトロの入り口まで行っている。今回はチラスの遥か手前のベシヤムまでが11時間、さらに翌日のフンザまでが15時間である。道路の工事中という事情もあったかもしれないが、この移動はきつかったし、着いた時間が午後9時40分では本当にうんざりだった。





フンザで 1 泊した翌日ミナピンまで 1 時間ほどバスで戻りトレッキング開始である。

ミナピンの街で現地のガイドやポーターと合流する。ここでは荷物は主にロバが運ぶ。ロバは信じられないような断末魔のオタケビを発する。荷物を持たされることに対して抵抗するためと思ったが、テント場に着いてからも鳴き声をあげ続けていた。道はしっかりしていて、勾配のきついところはジグザグになっていて、それなりに歩き易くしてくれている。



道の両側にはワイルドローズが咲いている。道の両側に規則正しく植わっていたので植樹されたのかも知れない。オダマキがあったとみんな言っていたが私にはオダマキには見えなかった。オダマキは私の好きな花であって、花びらの付け根のイカリ肩に特徴があるのだが、ここのは素直すぎる。

道には牛使いか羊使いかの小屋があつたりするので、トレッカー専用の道ではないようだ。だから歩き易い道ができていのかも知れない。

予定ではテントサイトのハパクンド(2800m)まで4時間であつたがもう少し早く着いたようだった。ロバが我々よりも先回りして、すでにテントも張ってあつたので、この日は余裕のある行動になった。男の人数が奇数であつたので、だれか一人が一人部屋になる。あみだくじでテントの3日間は私が一人部屋になった。私は2人部屋でも良い方であるが、やはり楽なことは楽である。高いところではなるべく小便を頻繁に行うので、この夜も4回くらいは夜中に外へ出て用足しをした。22時くらいが一番星がきれいであつた。12時を回ると月が出てきて星の数もぐっと少なくなった。



ワイルドローズ



羊飼いの小屋



牛や羊の放牧地をゆっくり登って行く。天気も良いし本当にのどかなトレッキングである。イスラムでは豚は食べないが牛は食べてよいということである。これがインドとパキスタンが別れる決定的な原因だったかもしれない。(これは私のいい加減な推測) ホテルの食事ではビュッフェの中に少しだけ牛もあったが、値段が高いということで少ししかなかった。ディラン・ラカポシベースキャンプ(BC)までの行動予定時間は5時間であったが、4時間にもならないうちに着いてしまった。楽になる方は大歓迎である。個人ベースでトレッキングをしている人にも何人か出会う。韓国人女性でポーターを一人付けて単独で歩いている人もいた。日本人で世界放浪をしているという人たちがここでたまたま知り合って二人で来たというのにも会った。アルパインの資料ではBCの標高は3450mであるが、私の高度計では100m以上低かった。ミナピン氷河が見渡せるようになってきた。氷河の表面というものは案外複雑のものであることは2006年のバルトロ氷河で経験済みであるが、ここでもその再来が予見される。

BCには一般用のテント設備などもあり、利用している人も何人か見かけた。我々のようにここへ来るまでに一泊している人は無いようで、ここまで日帰りする人もいた。着いてから食堂テントで一息ついてそろそろテントへ行こうと思っていた時に急に霰が降り始めた。一時は結構すごい勢いで下の表面が



牛の放牧



ミナピン氷河



ディランとミナピン氷河

雹で白くなるほどであった。やはり山の天気である。雲が去るとディラン(7788m)とラカポシ(7266m)が出てきた。ディランは三角錐の姿の良い山である。

トレッキング3日目はBC滞在日である。午前中は付近の小ピークに登ると、午後はミナピン氷河へ降りるというイベントが組まれた。BCから見ると、“本当にあんなところ登るの？”と言いたくなるような急登であったが、登り始めるとこの急登も克服できた。息が上がりが味の時もあったが、今回の体調はまずまずである。テントサイト全体とミナピン氷河が見渡せる。尾根の末端のピーク(3650m；私の高度計では3505m)に登るとラカポシの本当のピークが見えるようになり、テントサイトから見えていたのはピークの前部であったことが判る。この小ピークが今回登る最高地点であるので気分が良い。登りもかなりの急傾斜であったので降りには緊張が要求されたが、歩いてみるとなんとかなった。何回かしりもちをついている人もいた。歩いている途中、ディランやラカポシの山域から落雷と聞き間違えるような雪崩の音が何回か響いた。まあ我々には関係ないがやはり薄気味悪い感じにはなる。

テントに戻って昼食を食うと午後はミナピン氷河への探索である。まずサイドモレーンを超える訳であるがモレーン最上部まではピーク見物用でしっかりした道ができているが、降りになると氷河の上まで行こうという人は少ないためか頭大の岩がゴロゴロした道は歩き



小ピークの登り



ディラン・ラカポシBC



ラカポシ

づらい。1時間以上かけてやっと氷河の末端に着いた。ここからまだしばらく歩いて、こちらあたりが歩く限界かと思われる地点に着く。ほんのついでのもりで来ていたので嫌気がさしていたが、やはりここまで来てみると、その良さが判る。バルトロ氷河での体験と同じだ。あの時は氷河上で2週間かかったが、今回は4日間で感激に会えた。南米のパタゴニアなどの氷河は真っ白な美しさがあったが、ここでは氷河の上にまた川が流れていたり、大きなクレバスがあったりバラライターに富んでいる。この位置から見るディランはより一層輝いている。

アルパインのツアーリーダーは宇津木健さん。40年近く前の山口百恵がデビューしたころのドラマでお父さん役をやっていた俳優に似た名前の人がいたが、彼のお父さんはその俳優を意識して名前を付けたような気がするが、本人は巨人やレッドソックスで活躍した“上原浩治に似ていると言われます。”と言っていた。名古屋在住の33歳、二人の子持ちということでイケメンである。ひじょうに優しいしガイド業でジジババ慣れているので、旅行業が傾いたら介護保護士になれば適職だ。現地のガイドは通称サルちゃん。鼻下のひげが良く似合う良いおじさんだ。この地に縁が深かった有名な登山家の長谷川恒夫さんをガイドした人が経営するガイド事務所に所属するというベテランガイドである。日本語も少しは理解するようで、こちらからは日本語で話しかけてもニコニコと対応してくれる。通じたのかどうかは解らないが、深く追求しない方がお互いに幸せだ。



テント内の食事



ミナピン氷河



ミナピン氷河

メンバーは男5人に女9人の計14名。羽田の飛行場で、“ボリビアで会いましたねー”と声をかけられた。大阪西成のおばちゃんのYマナカさんだ。ボリビアの山旅紀を見返すとちゃんと記録されているので、大阪毎日新聞旅行のことなどたくさん話したと思えるが、覚えていなかった。まあしょうがない後期高齢者入門のタカちゃんなんだから。その他には知った人はいなかった。まあいつものことではあるがジジイババアの集まりである。私が男では一番年寄りだと思っていたが、Tガワさんが二つか三つ上のような。白髪痩身に銀座のクラブではさもモテそうであるが、カメラを持たせるためと称してパーソナルポーターを頼んでいる。行動中は常に遅れていたの、やはり年にはかなわないみたいだ。毎年徐々にではなく、累乗の勢いで衰えが来るという点で意見が一致した。この他にもパーソナルポーターを雇う人が3人いた。寝袋や防寒具など大きな荷物はロバやポーターが運ぶのであるから、自分で持つのは3kg程度であるがそれすら持てなくなったら俺の場合は引退する。あと何年かなあ。名古屋のSカイさんは元電力会社社員のたたき挙げ、私がネパールヒマラヤ8回と言ったら10回以上だと言っていた。私と同年であるが、今回のメンバーの中では一番強かった。あずみの村のMイタさんは、住んでるところからすると山の経験は少ないし、強くなる努力もしていない。ペースが速すぎると文句ばかり言っていた。筑波学園都市に住むIノウエさんは、その言動や雰囲気から長く研究所勤めをしていた元エリート雰囲気なたたえていて、山も結構強い。ババアなれど色気を残すAオヤギさんは、山登りの時もピアスを付け続ける。帽子もキャップかと思ったら、スポーツ用品店で扱うようなデザインではない。“ピアスが違う！”と声をかけた時のリアクションに、なんとなく素人っぽくないものを感じた。もしかしたらスナックのカウンターの向こう側の人かもしれないなどと、良からぬ想像を掻き立



荷運びのロバ

てる。ピスはウェアによって変えるらしい。山登りではいつも一番後ろの人よりも数歩遅れて歩いていたので、なんでこんなツアーに参加しているのかわからない。そんな中で盛岡から来たFトノさんは岩手山の小屋番もやっているということで一味違う。ダンナはロッククライマーであるという。そのFトノさんがあの人はレベルが違うというのが岩手県の山岳会で知り合ったというOイカワさんだ。この人の場合は背が高い割には身が軽く、一つ一つの動作からして違いが判る。全体にアルパインツアーのいいお客さんである人が多い。キリマンジャロやネパールヒマラヤなどの主だったコースはみんな行っているようだ。もっとも背中丸くなった人や1日目で下山してしまった人などもいたが。

オダマキだとかエーデルワイスなどと言っている人もいたが、もうひとつピンと来ない。エーデルワイスにしても、何とかウスユキ草には違いないと思うがヨーロッパアルプスで本物を見た俺からすれば、これはただの草だ。

下山後はフンザに戻って、時間が余ったので城見物を行った。Oイカワさんが“山じゃあ無ければつまらない”と言って退屈そうにしていたが同感である。イスラマバードの食堂で往きの飛行機以来のビールにありつけた。めでたしめでたしだ。

最終日はイスラマバード市内の見物をしてそのまま飛行場である。

世界遺産であるというタキシラ遺跡を見に行く。なぜか仏教の遺跡だ。一部は顔がつぶされている。イスラ



フウロ草



キンポウゲ科の花



フンザの城

ムでは偶像崇拜が嫌われるということだ。酒の禁止といい、偶像崇拜禁止といい、女はベールをかぶることも、ここでは俺は生活できないよ。女のベールはだいぶ軽減されているようで、顔まで全く隠している人は少ないくらいであったが、顔をすべて隠して眼だけ見せている人の眼はすごかった。いわゆる眼力である。強烈なものがある。米倉涼子なんてここに来たらただの普通の眼に過ぎない。

名前は忘れたがイスラムの神殿も見学した。心情的には暇つぶしにもならなかった。ヒマはヒマである。

食べ物は、マンゴー・サクランボウ・メロンなど豊富であった。逆に生野菜は極端に少なかった。2日目の車移動の時に昼食のビュッフェに生野菜が出たので喜んでいっぱい食べたら、次の休憩の度にピーピーになってしまった。まだまだ修行が足りない。目の前の欲に飛びつくようでは人生勉強が足りない証拠である。反省！

北杜夫の著書「白きたおやかな峰」を以前読んだことがあるが、全くその内容を忘れていた。日本に帰ってから読み直してみたが、まさにこのディラン・ラカポシとミナピン氷河がテーマであった。小説中に雪崩の場面などがでてくると、あの雷鳴のような響きがよくがえってきた。



タキシラ遺跡



民族衣装のサルちゃんと



イスラムの神殿

宇津木さんの写真

以下の写真はアルパインツアーのリーダー宇津木健さんが送ってくれたものである。
1000枚を超える写真の中のほんの一部である。



小ピーク頂上での集合写真



個人テントの内側

私はテント生活が好きである。50歳代までは自分でテントを担いで山登りをしていた。今はその体力がなくなったので、もっぱらテントで行われる海外ツアーを選んで参加している。



キッチンテント



夕焼けのディラン



トレッキング風景



ミナピン氷河



ロバの荷運び



ワイルドローズ



パキスタンの家族と一緒に



チャパティの食事と製造

パキスタンではかなり裕福と思える家族が車で遊びに来ていた。我々と一緒に写真に納まることを向こうから頼んできた。

その一方でホテルのガードマンは小銃を構えている。

女性はヘジャブと呼ばれるスカーフで顔を隠すのが普通だし、表には出ないことが一般的であったという。でも最近は顔を出す面積も増えていて、それを付けていない人もいる。

アルカイダの問題やインド・パキスタン紛争などで治安が心配されたが、治安の不安定なところに行くときにはいつもそうであれが、行ってみれば案外なんということもない。といって安心ばかりしてはられないが。



ガードマンも小銃を持つ